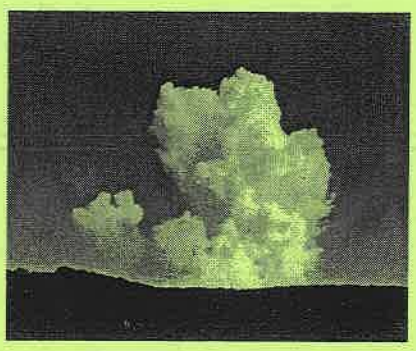
やまぐち自然派宣言

No. 4

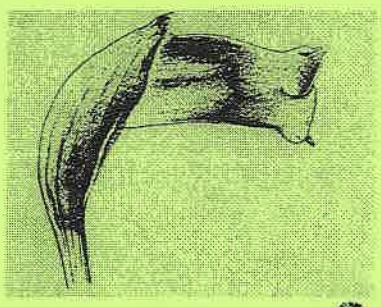


特集―西中国山地、錦川

千メートルを超える山々が連なる西中国山地、ここにはみごとな渓谷、滝、きれいな水、たくさんの生物たちが生息していた。

自然共生の思想

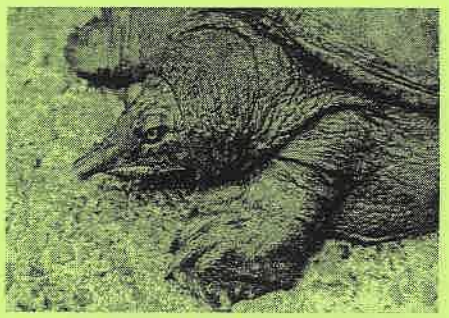
日本人は、古来神道や仏教の教えにより自然と共生してきた。しかし、明治における西洋文明の導入は大きな混乱を起こした。



共生

共生随筆

会員から寄せられた共生随筆、各地で守り抜いた動物や植物、そしてそれを含む自然がいきいきと描かれた。



やまぐち自然共生ネットワーク

2006年10月7日

(HIR.

ヒダサンショウオ

西中国山地国定公園
羅漢山県立自然公園

中国地方の西部、広島県、島根県、山口県にまたがる地域には、千メートル級の山々が連なる山地があり、国定公園に指定されている。ここには、恐羅漢山、冠山、寂地山などの山々やブナの原生林、匹見峡、三段峡、寂地峡などの峡谷美はみごとである。

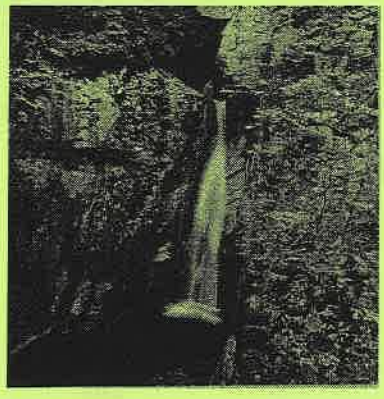
また、これに隣接した山口県には羅漢山を中心に鬼ケ城山、高鉢山、法華山などの山があり、高山植物も多く、四季折々の自然を楽しむ場として県立自然公園に指定されている。

これらの山々は、多くの貴重な野生生物の宝庫でもある。ブナを中心にした温帯林には、ヒガリサンショウオやコテングコウモリ、ツキノワグマなど貴重な動物が多く住んでいる。

錦川は西中国山地，莇ヶ岳に源をもつ山口県最大の川である。この川は延長百十キロメートル、流域面積八百八十四平方キロメートル、三十七の支流をもつ大川で、岩国市の三角州を作り、瀬戸内海に流れ出す。

全国の川で、川水の美しさを調べてきた人の話では、錦川は四国の仁淀川と共に日本一の清流という。昨年行われた第八回全国清流めぐり利き鮎会で、錦川の最大支流、宇佐川の鮎が見事グランプリに輝いた。錦川の上流部には深い谷が見られ、渓谷美でも天下一品である。寂地峡には清流のある渓谷があり、連続した「五龍の滝」は「日本の滝百選」にも選ばれ、人々に親しまれている。また錦町広瀬の上流から分かれている紅葉で有名な木谷峡の木谷川は「源流の森百選」に選ばれている。

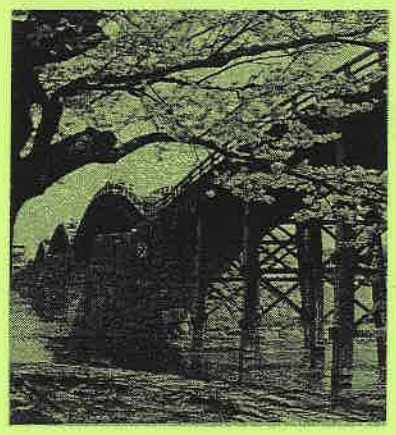
この川には豊かな生物相が見られ、多くの両生類、魚類、昆虫類のすむことで知られてきた。オオサンショウウオやカジカガエル、さらにゴギやアユが有名である。



寂地峡の滝

また、下流には名所錦帯橋がある。岩国藩主 吉川広嘉は城下町錦見と士居のある横山を結ぶ城門橋の建設に着手する。錦川は流れの速い川であることから、甲斐の猿橋や中国の西湖六橋などを研究して、一六七三年（延宝元年）に完成した。錦帯橋は川中に四基の島状橋台を石で築き、これに 五つのそり橋を架けた。橋の全長は二百五 メートル、幅は四・八メートルある。

錦帯橋は、二七五年間どんな風水害にもびくともしなかったが、昭和二十五年九月のキジア台風による連日の集中豪雨により頑丈な橋脚も力尽きて流失した。二年後に再建され、老朽化により五十年ぶりの掛け替えが平成十三年から三年がかりで行われた。掛け替えで解体された旧用材を感謝の気持ちを込めて錦川流域の森に帰し、「錦川源流の碑」として毎年一箇所づつ流域の住民が建立している。

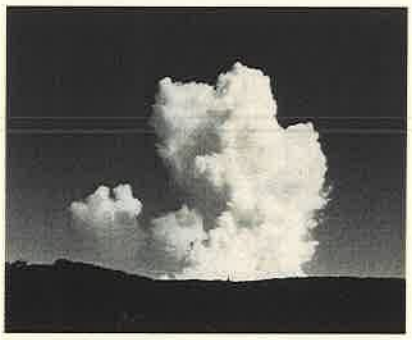


錦帯橋

錦川流域ネット交流会 代表世話人
白井 啓二

やまぐち自然派宣言

No. 4

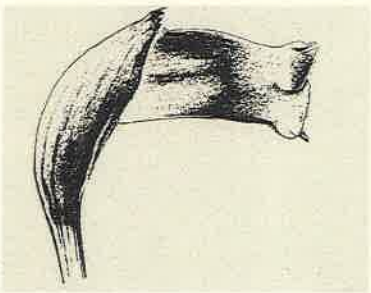


特集―西中国山地、錦川

千メートルを超える山々が連なる西中国山地、ここにはみごとな渓谷、滝、きれいな水、たくさんの生物たちが生息していた。

自然共生の思想

日本人は、古来神道や仏教の教えにより自然と共生してきた。しかし、明治における西洋文明の導入は大きな混乱を起こした。



共生

共生随筆

会員から寄せられた共生随筆、各地で守り抜いた動物や植物、そしてそれを含む自然がいきいきと描かれた。

やまぐち自然共生ネットワーク

2006年10月7日

先生

西中国山地国定公園
羅漢山県立自然公園

中国地方の西部、広島県、島根県、山口県にまたがる地域には、千メートル級の山々が連なる山地があり、国定公園に指定されている。ここには、恐羅漢山、冠山、寂地山などの山々やブナの原生林、匹見峡、三段峡、寂地峡などの峡谷美はみごとである。

また、これに隣接した山口県には羅漢山を中心に鬼ヶ城山、高鉢山、法華山などの山があり、高山植物も多く、四季折々の自然を楽しむ場として県立自然公園に指定されている。

これらの山々は、多くの貴重な野生生物の宝庫でもある。ブナを中心にした温帯林には、ヒダサンショウウオやコテングコウモリ、ツキノワグマなど貴重な動物が多く住んでいる。

錦川は西中国山地，莇ヶ岳に源をもつ山口県最大の川である。この川は延長百十キロメートル、流域面積八百八十四平方キロメートル、三十七の支流をもつ大川で、岩国市の三角州を作り、瀬戸内海に流れ出す。

全国の川で、川水の美しさを調べてきた人の話では、錦川は四国の仁淀川と共に日本一の清流という。昨年行われた第八回全国清流めぐり利き鮎会で、錦川の最大支流、宇佐川の鮎が見事グランプリに輝いた。錦川の上流部には深い谷が見られ、渓谷美でも天下一品である。寂地峡には清流のある渓谷があり、連続した「五龍の滝」は「日本の滝百選」にも選ばれ、人々に親しまれている。また錦町広瀬の上流から分かれている紅葉で有名な木谷峡の木谷川は「源流の森百選」に選ばれている。

この川には豊かな生物相が見られ、多くの両生類、魚類、昆虫類のすむことで知られてきた。オオサンショウウオやカジカガエル、さらにゴギやアユが有名である。

寂地峡の滝

また、下流には名所錦帯橋がある。岩国藩主 吉川広嘉は城下町錦見と士居のある横山を結ぶ城門橋の建設に着手する。錦川は流れの速い川であることから、甲斐の猿橋や中国の西湖六橋などを研究して、一六七三年（延宝元年）に完成した。錦帯橋は川中に四基の島状橋台を石で築き、これに 五つのそり橋を架けた。橋の全長は二百五 メートル、幅は四・八メートルある。

錦帯橋は、二七五年間どんな風水害にもびくともしなかったが、昭和二十五年九月のキジア台風による連日の集中豪雨により頑丈な橋脚も力尽きて流失した。二年後に再建され、老朽化により五十年ぶりの掛け替えが平成十三年から三年がかりで行われた。掛け替えで解体された旧用材を感謝の気持ちを込めて錦川流域の森に帰し、「錦川源流の碑」として毎年一箇所づつ流域の住民が建立している。

錦帯橋

錦川流域ネット交流会 代表世話人
白井 啓二

自然共生の思想

―文明開化による変化―

これまで自然共生思想の根源をたずねる試みを続けてきたが、明治になって西洋思想が一気に流れ込み、それまでの日本人の考え方は大きく変化した。ここで改めて、自然共生の考えの根源を再考してみたい。

「人の生命を支えるものは何か」という問いを設定しておこう。縄文人は、人の生命はそれを取り巻く山や川、石、草、虫・・・・・など全てのもの（自然環境）によって生かされており、常に自然からエネルギーが与えられていると考えた。だから、人は人を取り巻く全ての自然に神を発見し、その自然と共生する暮らし方をとってきた。その頃の考え方は、生命は「霊魂」であり、その霊魂は天地をめぐって（転生する）いた。草や虫はひょっとすると祖父や祖母かもしれない。だから人々は虫や草を大事にした。

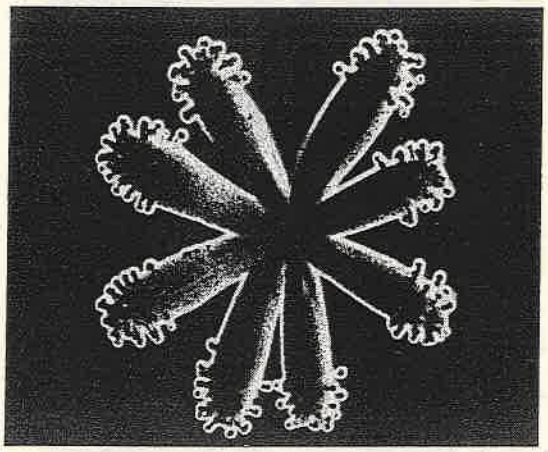
弥生時代には、人の食料は稲作（農業）によって与えられたが、稲は自然によって育てられるので、結局自然との共生なくしては人の生存はあり得ないとの認識があっただろう。その後も、大陸から工業や商業が入ってきて、日本の国家が誕生し、政治経済体制が整ってゆく。ここで、国は神道中心の体制で政治を行ったが、仏教の導入による文明化も必要になる。ここで、国は有能な若者を中国に送り込み、立派な僧侶を育成した。同時に中国の高僧を招いて、寺院を建て、仏教研究を進めた。導入された仏教はそれまで日本人の心の糧となっていた神道と積極的に融合した教理が作られ、神仏融合の経典が出来た。

仏の教えは生き物を殺傷をしないことを基本に、人を自然との関係に配慮し、草、木、虫、魚、石、水、土・・・との共生を貫く論理を導いた。つまり、人の命ははそれを取り巻く自然によって生かされ、活力を鼓舞されることに重点が置かれた。仏教は、本来哲学的かつ精神的で、本質を深く見つめる論理を展開した。そのために、日本では独自の仏教文化が生みだされてゆく。

西洋の思想は、とかく人間中心の傾向が強く、人は自然を征服して豊かな暮らしを獲得する・・・というものだ。幕末から明治にかけて、西洋文明が急激に入ってくると、日本人の考え方も大きな影響を受けた。進んだ西洋文明を競って学ぼうとする風潮、一方日本文明の優位性を強調する国粋主義者、これらが入り交じりつつ、混乱は続いた。

明治二十年に出た志賀重昂著「日本風景論」を読むと、日本の自然の美しさが詳しく論じられている。しかし、江戸期まで風景を支配的だった「神や仏の自然」は姿を消していった。花鳥風月にも神や仏の陰が見え隠れしてきたが、花崗岩の風景や石灰岩の風景・・・霧に見え隠れする風景のみが語られている。こうして西洋からもたらされた文明は、伝統的な多神教的な神を振り払って行く。

こうした中で、ラフカディオ　ハーンは、勤勉で、礼儀正しく、自然崇拝を続ける日本人の姿に接し、驚く。そして西洋文明の導入で、この素晴らしい日本古来の文明が大きく壊れて行く実態を見て、大きな危機感を持つ。それでも、新しい文明は大きな流れとなって、日本を覆って行く。



草の実から

徳冨蘆花の「自然と人生」は明治三十三年に出版されたが、多くに人々に読まれた。ここではフランスの画家コローの風景画に示された新感覚の自然叙景が主として語られている。こういうモダニズムの自然観が普及してくる。やがて日本では工業化が進み、機械の中の人間を中心にした機械文明が発達した。こうなると、自然は草や虫といった「もの」の側面から見られ、人間との深い精神的なつながりがすっかり断ち切られることになってしまう。

こうなると自然を構成する草や虫はまるで人間のアクセサリーか愛玩動物化してしまう。こうして人々は自然の本態を見失い、自然軽視の傾向が生まれてきた。

人と自然の精神的なつながりは自然の深い理解による愛情の進化を待たなければならなくなる。自然を構成する草や虫、石、水・・・・といった要素を徹底的に研究するのは昭和の後半からであろうか。この時期になると、要素分析的な探究方法から袂を分かち、自然を総体として把握する生態学的な探究方法が進み、自然は複雑な絡み合いのなかで維持されている実態が明らかになってくる。こうして、新しい自然共生思想が高まってくる。公害は人々に大きな反省をもたらした。軽視しがちだった草や虫の存在を再評価するきっかけになったのだ。ここで自然保護運動が大きく展開した。レイチェル カーソンのＤＤＴ摘発は、日本でもカーソンの会が生まれ、環境の大切さを大きく普及するきっかけになった。

また、ポストモダンの風潮は、自然を構成する草や虫を五感を通して感じ取る試みを生みだした。ネイチャー ゲーム（環境遊び）やサウンド スケープ（音風景）運動が盛んになる。環境省は名水百選や日本の滝百選・・・・といった自然に注目する戦略を次々に展開していった。こういった試みはある面で、人と自然のつながりを深める結果を導くに違いない。しかし、人が真に自然と心の絆を深めるのは奥深い研究や保護のための実働によらなければならない。人は研究者と一緒になって虫や草を探究し、太い精神的な絆を紡ぎ出すことが必要だった。

サンゴ化石

ボランティアによる道の修復

私たち「秋吉台パークボランティアの会」は月二回秋吉台に集まり、壊れたところを修復することに汗を流してきた。この過程で、会員達は秋吉台の保全について議論を重ね、いつの間にか「秋吉台愛」が生まれることを体験した。この愛は長年の中に深まり、秋吉台の自然と精神的な絆を結んだ。人と自然の精神的な絆は、自然共生の思想を生み出す必要条件だと思う。

（庫本　正）

特集　錦川

錦川流域の希少野生動物（両生類）

山口県内随一の長さ（一一〇．三㎞）を誇る錦川は、多数の支流を持ち、中上流域にはダム湖を有しながらも様々な生き物の生息を支えている。中国山地の端に位置する上流部は深い谷を築き、中流・下流域は幅の広い河原や河川敷を持っているため、そこに適応した生き物達は他の河川に比べ独特の種の生息を維持している。その代表は、オオサンショウウオである。他の一つは、ハコネサンショウウオである。その他にカエルの仲間であるカジカガエルは錦川中流域で旧文部省指定の天然記念物として古くから知られており地域住民の関心も高く大切に守られている。これらサンショウウオの仲間、カエルの仲間について、最近実地調査を行った。

カジカガエルの調査は、二〇〇二年六月～一〇月にかけて天然記念物として指定された区域について行われた。その中で特筆すべきは、調査の期間中、大小幾つかの発育段階のオタマジャクシが確認されたことである。このことはカジカガエルの産卵期間は結構長いということを示している。

ハコネサンショウウオの調査は、二〇〇三年から数回にわたり錦川支流の宇佐川上流部で調査し、外鰓の見られる二～三年個体を確認できた。

オオサンショウウオについては、二〇〇四年と二〇〇五年、産卵のため移動する時期に合わせて錦川及び宇佐川を調査したが、直接の確認には至らなかった。しかし、地元の人への聞き取り調査により最新の情報が得られた。

その他、ニホンヒキガエル、モリアオガエルなど希少野生生物種についてもふれ、錦川流域の自然についても紹介する。

山口県野生生物保全対策検討委員会副委員長
山口大学名誉教授　　山岡　郁雄

錦川流域旧市町村

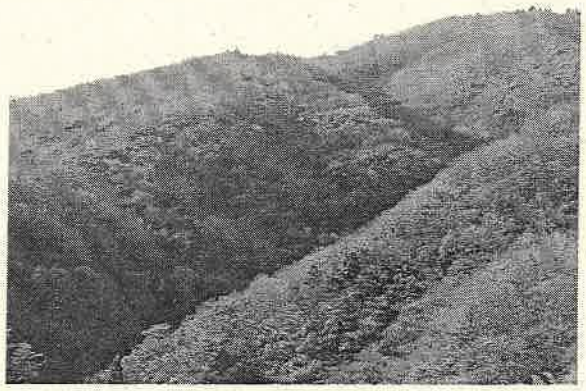
西中国山地のツキノワグマ

ツキノワグマは山口県最大の哺乳類で、全身が黒く、胸に白い三日月模様があり、大きい個体の体重は一〇〇キログラム、頭胴長は一四〇センチを超える、まさに森の王者である。西中国山地のツキノワグマ個体群は山口・広島・島根の三県に生息する個体群で、隣接する鳥取・岡山・兵庫県に生息する東中国山地個体群の分布域から約一〇〇キロメートル離れた孤立個体群である。環境省のレッドデータブックでは絶滅のおそれのある地域個体群に指定され、山口県では最も絶滅が危惧される絶滅危惧ⅠA類に指定されている。

錦川流域の周南市（旧鹿野町、旧徳山市）、岩国市（旧錦町、旧美和町、旧本郷村）は、ツキノワグマの生息の中心になる。標高八〇〇メートルを超える山々が連なり、かつてはブナを中心とする落葉広葉樹が広がる森があったが、戦後の拡大造林により、多くはスギ・ヒノキの人工林となってしまった。ツキノワグマは季節に応じて植物の葉、芽、茎、花、実や昆虫類を中心とする動物を食べる雑食性の動物である。特に秋は冬眠を前に木の実などを過食すると考えられている。落葉広葉樹の森はツキノワグマに多様な食物を提供する大切な森だが、手入れのされていないスギ・ヒノキの人工林には、ツキノワグマが好む動植物はほとんどない。結果的にツキノワグマを閉め出す環境が増えてしまった。

自動カメラで撮らえたツキノワグマ

二〇〇四年の秋、ツキノワグマ出没・目撃情報が県東部を中心に三〇〇件を越え、例年の六倍近くになり、有害獣などで捕獲されたツキノワグマは山口県内で三〇頭を超え、ツキノワグマたちにとっては受難の年になった。科学的検証はなされていないが、山の木の実が極端に不作だったのと、度重なる台風の襲来が原因では



落葉広葉樹林

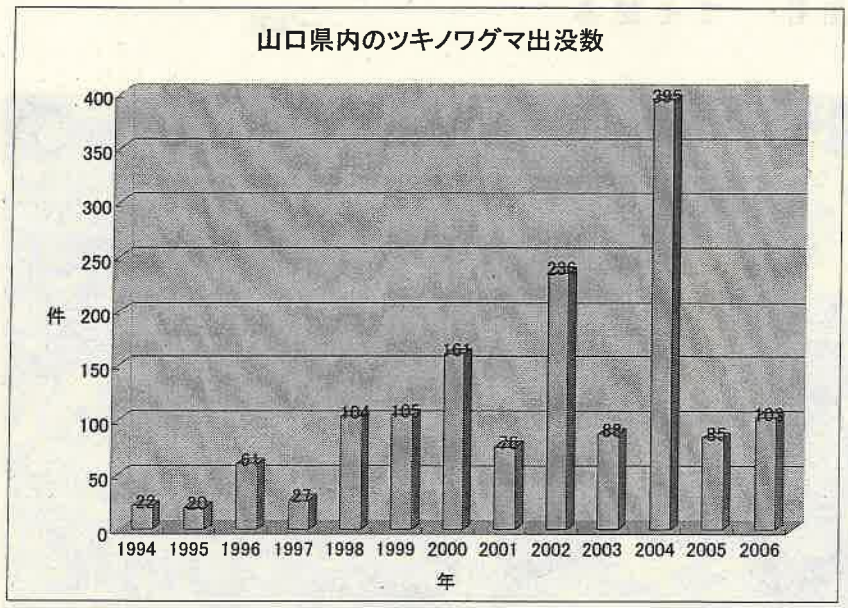
ないかと考えられている。ツキノワグマを含めて哺乳類は、採食・移動・休息など動きまわる行動圏が決まっている。通常、オスグマで年間平均七〇平方キロメートル、メスグマは四〇平方キロメートル程度と考えられている。二〇〇四年発信機をつけた個体の中には予想外の動きをした個体がいた。九月までは目立って大きな動きはなかったが、一〇月に入ると二週間で直線距離三〇キロメートル近くを動き、さらに動き続けて、最終的に捕獲されたが、行動圏は三〇〇平方キロメートルを超え、餌を求めて動き回ったように思えた。

ツキノワグマが人里に出没することは、人身事故の危険性もあり、私たち人間にとっては脅威である。しかしながら、生態も十分に解明されておらず、対策は模索状態だ。落葉広葉樹の森の復活とスギ・ヒノキの人工林の整備など長期的課題が山積みだが、人里と森との境界を明確する方法を確立しながら、共存できる道を切り開いていけたらと思っている。

田中　浩

樹上で採食するクマ

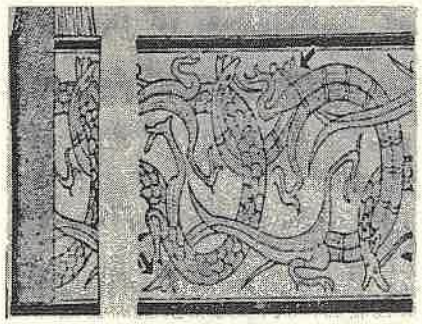
発信機をつけ放獣を待つクマ



水の民俗

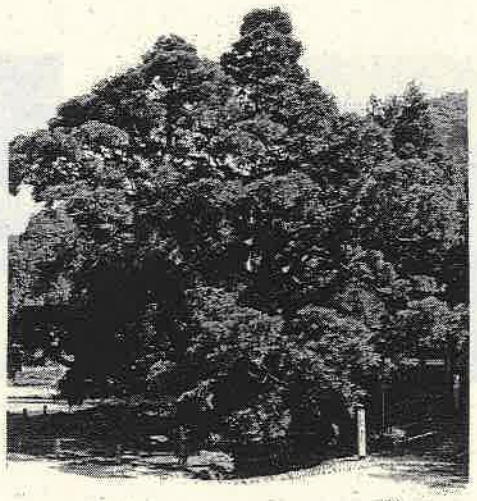
水は、人の暮らしを支える大切な資源である。大雨が降ると水は川から溢れだし、洪水を起こす。一方旱魃が続くと、田や畑の作物は枯れ、大飢饉をもたらす。大昔から、人々は水を支配するのは水の神（龍神や蛇神）と考え、水源や水の湧き出すところに祀った。こうして人々は穏やかな暮らしを願ったのである。

水が地下を流れるカルスト台地では、いつも水不足に悩まされる。だから秋吉台では、水の湧き出す洞窟や湧泉に水の神「龍神」が祀られている。そればかりか、雨乞いを行う山にさえ、「龍」の字を冠した名前が付いている。「龍護峰」等はその例だろう。



尾に蘐をつける龍

（輝県 前4世紀『輝県発掘報告』より）

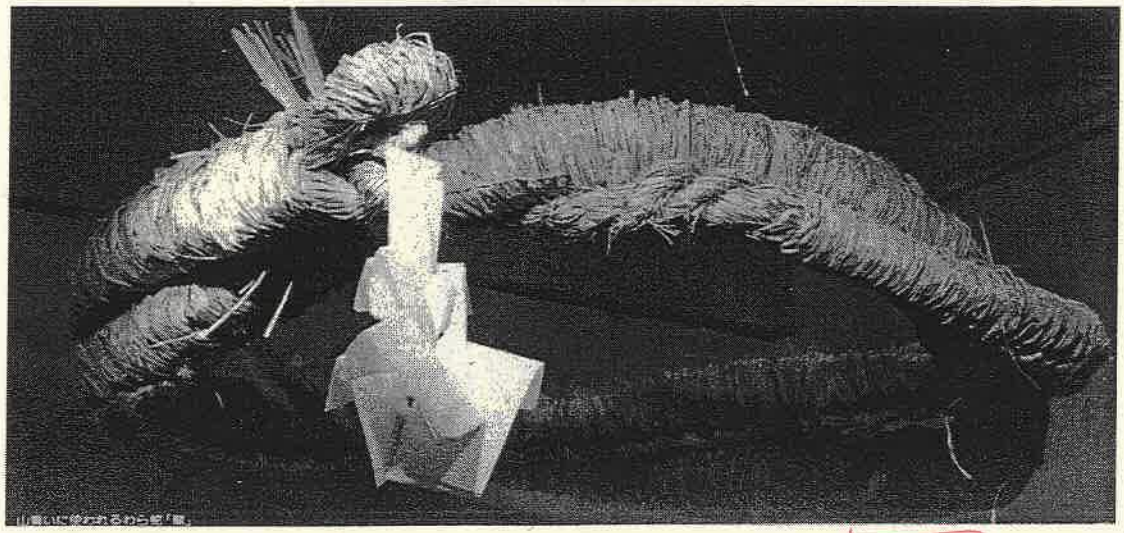


一本杉

羅漢山にも「羅漢の蛇の池」という池があり、蛇神が祀られている。六日市町の「大蛇が池」の水は旱魃でも枯れることがない。そこで村人はこの池の畔に立っている一本杉で雨乞いを行ってきた。

この雨乞い神事は、神主が一週間大元神社でお籠もりをし、満願の日に、氏子達が総出で「わら蛇」をつくり、之を抱えて練り歩く。練りが「大蛇が池」に着くと蛇の体を水につけ、降雨の祈願をした。そしてわら蛇を一本杉に巻き付ける。

わら蛇を使った雨乞い神事は山口県でも玖珂郡の一部に残っている。

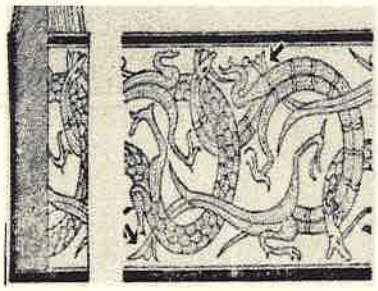


わら蛇（六日市）（水源会館より）

水の民俗

水は、人の暮らしを支える大切な資源である。大雨が降ると水は川から溢れだし、洪水を起こす。一方旱魃が続くと、田や畑の作物は枯れ、大飢饉をもたらす。大昔から、人々は水を支配するのは水の神（龍神や蛇神）と考え、水源や水の湧き出すところに祀った。こうして人々は穏やかな暮らしを願ったのである。

水が地下を流れるカルスト台地では、いつも水不足に悩まされる。だから秋吉台では、水の湧き出す洞窟や湧泉に水の神「龍神」が祀られている。そればかりか、雨乞いを行う山にさえ、「龍」の字を冠した名前が付いている。「龍護峰」等はその例だろう。



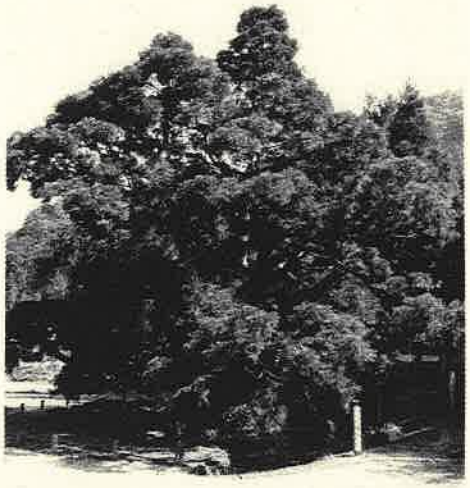
尾に蘰をつける龍

（輝県 前4世紀『輝県発掘報告』より）

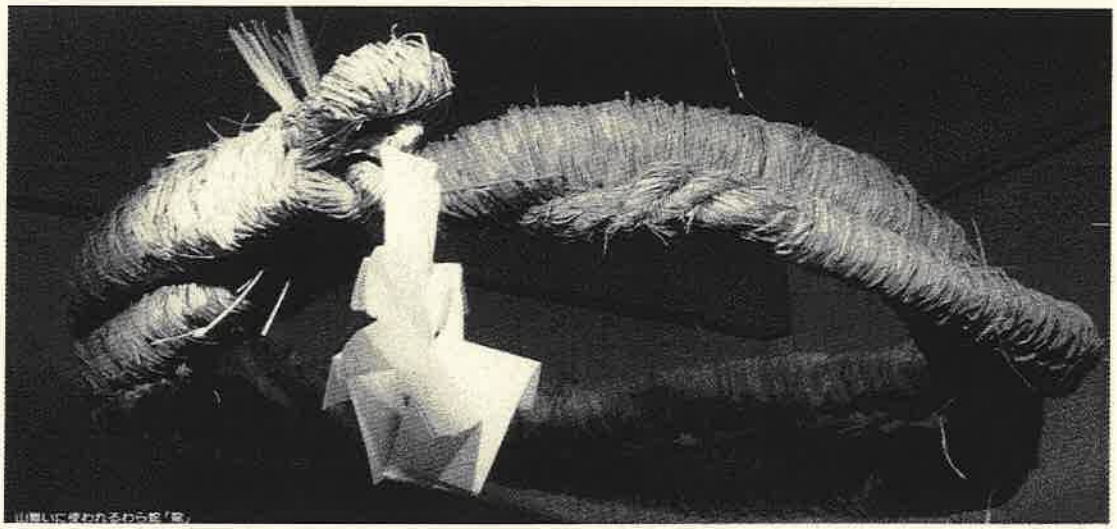
羅漢山にも「羅漢の蛇の池」という池があり、蛇神が祀られている。六日市町の「大蛇が池」の水は旱魃でも枯れることがない。そこで村人はこの池の畔に立っている一本杉で雨乞いを行ってきた。

この雨乞い神事は、神主が一週間大元神社でお籠もりをし、満願の日に、氏子達が総出で「わら蛇」をつくり、之を抱えて練り歩く。練りが「大蛇が池」に着くと蛇の体を水につけ、降雨の祈願をした。そしてわら蛇を一本杉に巻き付ける。

わら蛇を使った雨乞い神事は山口県でも玖珂郡の一部に残っている。



一本杉



わら蛇（六日市水より源会館）

川のアート

川や流れる水は多くの芸術家にとって魅力あるテーマである。錦川では、芸術性豊かな、美しい橋が架けられ、多くの人々の心をとりこにした。錦帯橋は天下に誇る芸術品で、この地方の人々の誇りである。

東京芸術大学の学長を勤めた澄川喜一先生は日本を代表する彫刻家だが、先生の志も、この橋と深い関係があるのだろう。

昭和二十五年九月十四日、この地方に台風が襲った。キジア台風である。川水はみるみるうちに増水し、激流が橋を襲った。三百年もの長きにわたり不落を誇った橋が、目の前で崩れたのである。あの美しい木造のアーチの橋は、水流に捻られ、ボッキー・ボッキー・バリバリ・・・・・という橋の悲鳴ににた音を残して水中に落ちていったのである。この様子を見ていた先生はいつの間にか彫刻家をめざすようになったという。

諸国名所百景 周防岩国錦帯橋
（二代 広重）

水にうかぶ葉の花（ニルス・ウド）

清流の美しい水も人の心をうつ美しい色彩を見せてくれることもある。秋吉台にある弁天池は虹が湧き出す水として多くの人々に感動を与えている。風が吹くと、水面が波立つ。すると、この波がレンズの効果を示し、美しい色彩を作り出す。この水の色彩美や形の不思議に魅せられた芸術家達は作品作りに取り組んできた。この美しい水の上に花を盛った木の葉を浮かべて、新風を起こした芸術家も現れた。

錦川は日本一の清流だが、最近では、日本中の川水はどんどん汚れている。夏になると、雨が少なくなり、川水は少なくなる。こうなると、泡だらけの水が流れ始め、その汚さに目を疑う。時には見たこともないような珍しい流れ文様を作り出すこともある。自然に目ざとい写真家達は早速作品作りに挑戦する。

水にもその不思議な性格を秘めたさまざまなアートが創出されてきた。

川をうめる泡の流れ（写真）

川のアート

川や流れる水は多くの芸術家にとって魅力あるテーマである。錦川では、芸術性豊かな、美しい橋が架けられ、多くの人々の心をとりこにした。錦帯橋は天下に誇る芸術品で、この地方の人々の誇りである。

東京芸術大学の学長を勤めた澄川喜一先生は日本を代表する彫刻家だが、先生の志も、この橋と深い関係があるのだろう。

昭和二十五年九月十四日、この地方に台風が襲った。キジア台風である。川水はみるみるうちに増水し、激流が橋を襲った。三百年もの長きにわたり不落を誇った橋が、目の前で崩れたのである。あの美しい木造のアーチの橋は、水流に捻られ、ボッキー・ボッキー・バリバリ・・・・・という橋の悲鳴ににた音を残して水中に落ちていったのである。この様子を見ていた先生はいつの間にか彫刻家をめざすようになったとい。

諸国名所百景 周防岩国錦帯橋
（二代 広重）

水にうかぶ葉の花 (ニルス・ウド)

清流の美しい水も人の心をうつ美しい色彩を見せてくれることもある。秋吉台にある弁天池は虹が湧き出す水として多くの人々に感動を与えている。風が吹くと、水面が波立つ。すると、この波がレンズの効果を示し、美しい色彩を作り出す。この水の色彩美や形の不思議に魅せられた芸術家達は作品作りに取り組んできた。この美しい水の上に花を盛った木の葉を浮かべて、新風を起こした芸術家も現れた。

錦川は日本一の清流だが、最近では、日本中の川水はどんどん汚れている。夏になると、雨が少なくなり、川水は少なくなる。こうなると、泡だらけの水が流れ始め、その汚さに目を疑う。時には見たこともないような珍しい流れ文様を作り出すこともある。自然に目ざとい写真家達は早速作品作りに挑戦する。

水にもその不思議な性格を秘めたさまざまなアートが創出されてきた。

川をうめる泡の流れ（写真）

川と水の文学

山口県を代表する文学者、中原中也と山頭火には川や水をテーマにした作品がある。中也は、長門峡をこよなく愛した。

冬の長門峡

長門峡に、水は流れてありにけり。
寒い寒い日なりけり。

われは料亭にありぬ。
酒酌みてありぬ。

われのほか別に、
客とてもなかりけり

水は恰も魂あるものの如く、
流れ流れてありにけり。

やがても蜜柑の如き夕日、
欄干にこぼれたり。

あゝ！——そのような時もありき、
寒い寒い　日なりき。

長門峡

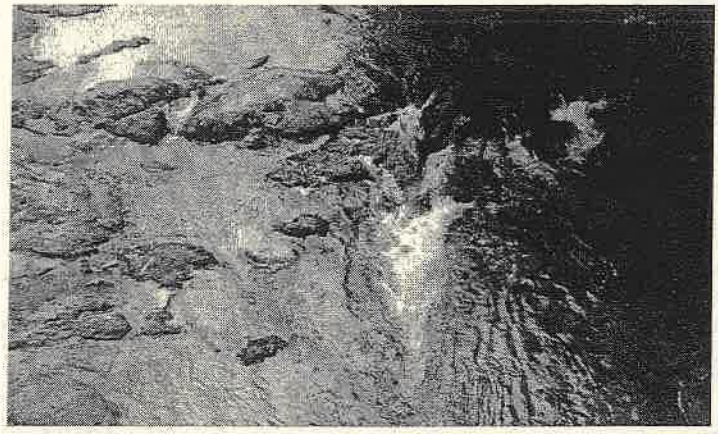
私の友人は結婚の披露を長門峡の料亭で行った。SL列車で長門峡駅に下り、静かな料亭から水の流れを楽しんだ。静かな水は流麗に流れた。まるで、神々に従うような美しい流線だった。しかもそこには丸顔の少女が現れて、水と戯れはじめた。人が川水にいだかれたように見えた。

山頭火にも水をテーマにした随筆がある。ここで、「水平半勺の水」（道元禅師が半勺の水も捨てることなく、大切に使うことをすすめた）という遺訓から禅門では水も生かせるだけ生かす心遣いを説いている。山頭火は、「水のごとく湧き、水のごとく流れ、水のごとく詠いたい」という自分の願いを述べている。

へうへうとして水を味ふ

腹いっぱい水を飲んで来てから寝る

岩かげまさしく水が湧いている



水の流れ

共生随筆

岩国の城山に生きる「フシノハアワブキ」

安田　和人

あわぶき科の樹木 フシノハアワブキ は、国内では対馬に自生するといわれるが、一九五三年に和田益夫氏（田布施在住）によって、岩国城山の城跡下方で数株発見された。

しかし、岩国城天主が再建されて以来、その景観上、城跡下方のフシノハアワブキを含む樹木が再三伐採された。幸いにも、フシノハアワブキは切り株から萌芽し続けたが、成長は阻まれた。わたしは、一九八五年五月に市に申し出て、「これは学術的に貴重な木だから伐らないで下さい」と株元からの樹高一・二メートルの株芽に標示した。

以来、成長を見守り続け、五メートルほど生育した一九九五年六月二八日、待望の初開花を見た。「オッ、花だ！　よくも育ってくれた。」と感激と感謝とで見入った。もちろん秋にはナンテンの実大の赤い実が見られた。

フシノハアワブキは今年も多くの枝先に実をつけた。秋空に浮かぶその様は、私には至福の感である。

フシノハアワブキの花

「余田の臥龍梅」を後世に

樹木医　藤原　俊廣

「余田の臥龍梅」の樹勢回復に係わりだして数年になる。この梅は、野梅系で飛梅と呼ばれている一品種で、古木になると、枝が垂れ下がって地面に接したところから不定根が発生し、それが新しい分身として育つ性質を有している。

生あるものはそれぞれ寿命があるが、臥龍梅のように新しい分身が育てば、母樹である本体は衰退する運命にある。昭和八年国の天然記念物に指定された当時の元株は、幹周が五・五メートル、樹齢四百年の古木であったというが、いまでは朽ち果てた元株から往時を忍ぶのみである。

元株の周りの十数本の分身も七十年近い古木となり、生育環境の悪化と病害虫等の発生から樹勢の衰退が著しかったが、樹勢回復のための診断と治療の効果がようやく見られるようになり、美しい花を咲かせるようになった。

まだ、臥龍梅との対話できるまでの域に達していないが、この梅を後世に引き継ぎできるようにこれからも地道に取り組んで行きたいと思う。

余田の臥龍梅

自然に対する思い

豊田ホタルの里ミュージアム　河野啓介

「自然」と一口でいっても、何が自然なのかよくわからない。人工林は？ 品種改良された生物は？ 放置された草原は自然で、水田は自然ではないのか？ 考えれば考えるほど、自然とは何かよくわからない。「自然とは、人間の手の加わっていないもの」と辞書に書いているが、なんとなく釈然としない。

最近、講師として小学校などに派遣され、生き物の話をする機会を得る。そのような時、子供達が身近な生き物に触れていないことに気づく。そして、生き物に触れられない理由として、ゲームやスポーツの方が面白いと丁寧に教えてくれる。しかし、「所詮それらは、人間が造ったものだ、自然には叶わない」と心の中で呟いてしまう。つまり、私は自然とは、人間が叶わない絶対の物だと思っている。人間は自然から色々なことを教えてもらって現在の文明を得た。だから、私たちは「自然からもっと教えてもらいたい」と思うので、子供のうちから何度も触れ、色々なことを教えてもらうべきだと思う。

自然とは、「人間の手が加わっていないもの」ではなく、「人間が手を加えることのできないもの」だと思う。それが、自然に対する私の思いである。

湧泉の水草

水田雑草

秋吉台エコミュージアム　田原　義寛

休耕田を活用して、猫の額ほどの土地にビオトープを作っている。作っているとは聞こえがいいが、実はなかば放任主義。水を五センチほど溜め、あとは「何が生えてくる」のをじっと待っているのだ。もともとが水田なのだから水田雑草にことかかない。

コナギやイボクサ、タカサブロウといったごく普通の植物から、ミズワラビやアブノメという、最近あまり姿を見かけないものまで、狭い場所を少しずつ分け合うようにして生えている。それぞれに好みの場所があるらしく、けっしてビオトープ一面にはびこる草がないのが愛らしいところである。

一昔前であれば、こんな「水田雑草の多様性」は許されなかったに違いない。休耕田の増加や減農薬の結果、そこかしこで多少の生存権があるようだ。ただ、田んぼは適度に耕作がされないと、やがては多年草の藪と化してしまう。毎年水が溜まり、稲が作られることこそが、水田雑草の繁栄の鍵なのだ。本当はビオトープではなく、ごく普通の水田で多様な水田雑草が見られたらと思うのだが。誰

か水田雑草の愛らしさと個性を愛でて、稲との共生を認めてくださる農家の方はいらっしゃらないだろうか。

自然との共生館「つのしま自然館」のこと

豊北町自然観察指導員会　伊藤　忠雄

豊北町自然観察指導員は、平成五年、山口県自然観察指導員協議会豊北町実行員により活動を始めた。以来十三年、北長門海岸国定公園内の角島を中心にした海岸で、自然環境の豊かさの把握を目標に、自然観察会を継続してきた（五十七回）。この間、角島大橋（二〇〇〇年）、つのしま自然館（二〇〇三年）が完成した。

もともと、架橋がもたらす自然環境への影響を捉える手掛かり自然環境基礎資料作りとして始めた活動であったが、関連するビジターセンターつのしま自然館が、開通後拠点として活用できるという、行政とのパートナーシップも実現したと考えている。

ヒロハノカワラサイコ　テンジソウ

ちなみに現在、自然環境基礎資料として、①「角島自然観察ガイド」（自然観察会・地質地形資料）」と岩石化石標本、②海藻目録・陸上高等植物五五五種類の目録（野生種類中心）及び写真、③角島周辺海域の貝類採集目録及び採集標本（約三〇〇種類）、④角島で確認できた野鳥目録（二一一種類）と生態写真などがあげられる。そして、⑤つのしま自然館設立に合わせるように漂着し、地区民の手によって残された新種クジラの骨格標本がある。

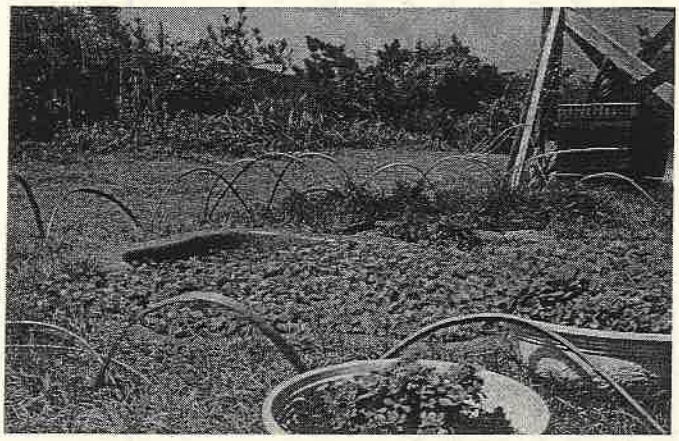
これらは、つのしま自然館常設展示や刊行物などとして公開活用されている。

今後も、つのしま自然館を拠点として、地域特有の自然との共生を求めた活動を展開していきたい。

架橋前に実施した自然観察会後の感想として、ある小学生が残してくれた言葉がある。

橋が架かっても、角島であってほしい！

これこそ、自然との共生を求める活動の本随を表しているように思える。



ダルマギク

山口県自然観察指導員協議会の最近の活動

山口県自然観察指導員協会長　黒田　義則

当会では、本部・一～六支部を合わせると、年間三十数回の観察会を県下の何処かで行っている。また、（財）日本自然保護協会（NACS-J）から要請を受けて観察会や調査を行うことや県・企業から観察会の依頼を受けることもある。観察会のテーマはさまざまで、植物が一番多く、他に鳥、キノコ、虫（チョウ、トンボ等）、水生昆虫（川）、貝、陸貝、地質、岩石、魚、（海、淡水）など幅広く行っている。

現在、NACS-Jの指導を受けて行っている調査には山口県内の本土、島嶼を含めた二一五箇所の砂浜の「海岸植物群落の調査」がある。多くの会員が参加することで、山口県海岸の自然環境の保護・保全を見守ろうと思っている。また、企業よりNACS-Jを通じて「弊社グループによる自然保護活動の普及にあたり」との依頼があり、岩国は城山で自然観察会、周南では東川の水生生物観察会を行うことに決定しました。観察会を通して楽しみながら、自然のすばらしさ、自然の大切さを実感してもらえればと思っている。

自然観察会

「共生」への投稿のお願い

「共生」誌も創刊から二年になり、四号を出版した。手探りの状態で会誌づくりは進められてきたが、内容や出版形態など、その方向も次第に定着してきたように思われる。

次号からは、会員の皆様からの投稿を軸に共生社会のすばらしさ、楽しさを追求する内容を多く取り入れたいと思っている。そこで、皆様からの自由な意見をどしどし投稿していただき、内容を充実して行きたいと思っている。次号は平成十九年三月に出版が計画されているので、今年末の十二月三十一日を締め切り日としたい。投稿原稿の送り先は、やまぐち自然共生ネットワーク事務局か、山口県自然保護課宛にお願いします。

編集係

ネットワークの会員紹介

（六）松村澄子さん

コウモリのエコロケーションを研究

松村さんは山口大学理学部で学生を指導され、コウモリの音響行動学研究に取り組んでいる。

コウモリは超音波を発声し、それが対象物に衝突し、跳ね返ってくる「こだま」から、対象物の形状、距離、方向、速度などの情報を読み取るエコロケーションにより、暗闇の中で、昆虫などの餌を捕らえたりしている。この食虫性コウモリのエコロケーションは探索期、接近期、終期の三期に分けられ、周波数や間隔を使い分けていることなどを明らかにされた。ただ、超音波の検出距離は十メートル程度と短く、遠くのものは目を使っている。

秋吉台に多く生息しているキクガシラコウモリは、洞窟内で集団で出産することが知られている。暗闇の中で、どのようにして親子間のコミュニケーションをとっているのでしょうか。赤ちゃんコウモリは、産み落とされると、すぐに声を出し始め、母親は羊水で濡れた子の体表をなめながら、子の声に同期させ、特別な「母親語」をだし、子は母親の声に反応するようになる。子供が洞窟内のコロニーで母親の帰りを待ちながら出される超音波を可聴音に変換すると、あたかも「おかあさん」と言っているように聞こえる。母親は自分の子供の声を聞き分け、子供のもとに戻ってくる。この様子を観察し、研究されたのが松村さんです。

全国各地のコウモリの音声分析や、西南諸島において新種のコウモリであるヤンバルホオヒゲコウモリ、リュウキュウテングコウモリの発見にも尽力されるなど行動派である。

中国や韓国など国外の研究者との共同研究により、アジアのコウモリについても積極的に研究されている。また、山口県内においてもこれまで確認されていなかったオヒキコウモリ、コテングコウモリコなどの生息を確認するなど、新事実をどしどし発表されている。

熱帯性のカグラコウモリの分布北限にある西表島においても、二十年以上詳細な生態と社会構造を研究され、保全活動もされている。野外での研究は、地道な積み重ねである。ねばり強く研究されている方が、山口県にもおられる。

コテングコウモリ

編集後記

「共生」四号をお届けします。

今回は第三回「リレーミーティングin錦川流域」に合わせて、「錦川特集」を組んだ。錦川は日本一の清流で、水量も多く、豊かである。

また、「自然共生の思想」では、長い年月をかけて築いてきた日本の文明が、明治における西洋文明の導入で、混乱をきたした事が取り上げられた。そして人と自然の精神的なつながりの重要性とそれを取り戻す方法が語られた。

今回から、一人でも多くの方々の声を本誌に掲載してゆくために、「共生随筆」の欄を開いた。早速、各地で自然保全に正面から取り組んでおられる方々の声が掲載できた。この欄は更に充実してゆきたいと思う。皆様のご協力を心からお願いしたい。

編集係

庫本　正

田中　浩

高実　りか